

# 母校の伝統我らにあり

細屋 秀人（新32回生）

私の高校生活は、昭和五二年春の木造校舎から始まり、クラブ選定には吹奏楽を経験していただきましたので、吹奏楽部に入部いたしました。部室には先輩方の功績をたたえるトロフィーや表彰状が所狭しと並べられていましたが、楽しくクラブ活動が出来れば良いと思っていました私にとって、先輩方が話される伝統とは古く、重苦しいものでした。

新入部員の日課は、伝統ということでランニング、懸垂、腹筋運動と楽器を持てば同じ音を長く出し続ける毎日で、楽しいクラブには程遠い毎日をすごしていました。

そのような折、岩手高校が火災に遭い、部室の跡を探すと、溶けて曲がった楽器と焼けた譜面が散らばり、吹奏楽部伝統の象徴でもあったトロフィーや、表彰状などはすべて灰になっていました。楽器を失った吹奏楽部は活動停止することを、私を含めた新入部員は容易に予想できませんでした。

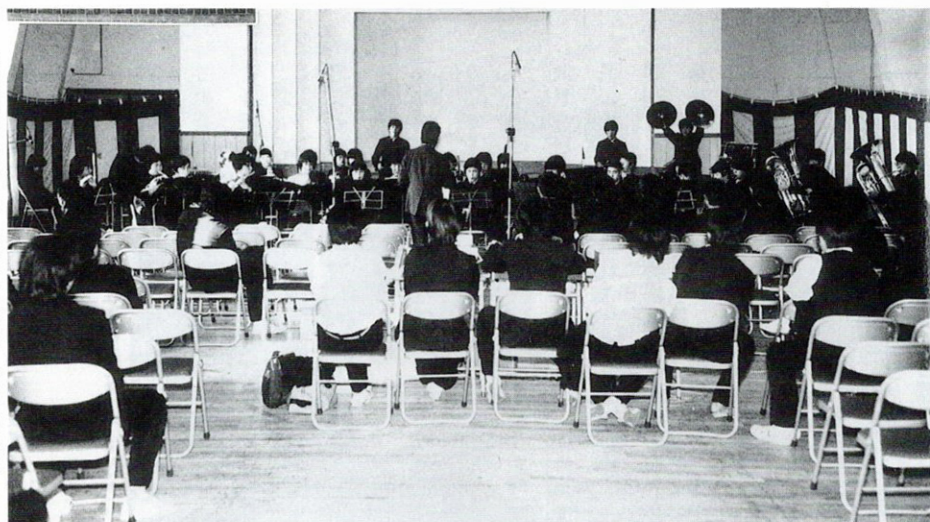
ところが焼けた譜面の整理がきますと、新入部員は以前と同じ日課が始まり、予想に

反して楽器のない吹奏楽部が早くも活動し始めたのです。先輩方は次々と練習メニューを作成し、私は毎日そのメニューを消化してきました。

数カ月後、楽器が一つまた一つと整い、音の無かった吹奏楽部に、新しい音が増えていく事を部員皆で喜び合うとともに、本格的な部活動が開始する事を感じさせてくれました。

練習は休日に関係なく毎日行われ、毎年行われていたコンクール、演奏会などにすべて出場し、わが吹奏楽部の健在ぶりをアピール出来ました。翌年も同じく催し物に出場しましたが、工夫次第でもっと上達するような手応えを、コンクールにおいて感じとりました。

私達が三年生となり、ぜひ実現させたかったこと、それは吹奏楽部初めてのコンサートを開催することでした。部員はその目標に向かい、自ら練習方法を工夫し以前にも増して部員が結束していきました。そして顧問の先生方、OBの方々の手厚いご指導により、岩手県民会館大ホールにおいてファーストコン



石桜祭でのプラスバンド演奏（昭和54年）

サートを開催することが出来たのです。

さらに自信をつけた部員は、吹奏楽コンクール東北大会出場を目標に練習を開始いたしま

した。三年生も新入部員もなく、私が入部当時苦痛だった練習メニューを自らこなし、コンクールは東北大会出場を決め岩手高校吹奏楽部が完全に復活を遂げました。

私達は火災により先輩方の功績を伝える物をすべてなくしてしまいました。しかし、先輩方から岩手高校独自の音作りの方向性や、練習方法のガイドラインを、伝統という形で伝えていただいたことにより、吹奏楽部早期再建の牽引力となりました。

このような体験から、伝統とは古く重苦し

いものではなく、高度な技術やセンスを先輩へ伝える、先輩方のメッセージのように私には思えました。

私達は早く歴代のレベルに近づきたく夢中で練習し、満足のいく結果が得られた事とても幸せでした。しかし、私の卒業した翌年から、先輩達が吹奏楽コンクール東北大会において、連続して優秀な成績を収めてくれたことで、私達は先輩から、そして私達は後輩へメッセージを伝える事が出来たと確信したとともに、後輩達が頑張っている姿をとて

嬉しく思いました。

良き伝統に触れ、その伝統を自分のものとし卒業した私は、岩手高校の特色ある校風を懐かしく思い出されますとともに、現在の生徒諸君が新しい発想で、さらに高いレベルの伝統を作り飛躍されることを望みます。

最後に、火災により学校教材すら残らないゼロからの復興に、惜しみないご援助、ご指導頂きました先生方、諸先輩方、並びにご支援頂きました皆様により、無事高校生活を送れましたことを感謝いたします。